国際政治経済論演習　　上智大学外国語学部フランス語学科３年
2005年度ゼミ論要旨　　A0353058
常盤　真里奈

寿地区の過去と現在

「日本三大ドヤ街」の一つ、横浜の寿地区は東京の山谷、大阪の釜ヶ崎に比べて非常に小規模であり、その面積はわずか250m四方(0.06k㎡)しかない。その狭い土地に115軒もの簡易宿泊所（ドヤ）が密集しており、真横にある伊勢佐木町やみなとみらい地区が醸し出すミナト・ヨコハマの雰囲気とはまったく異質の世界を展開している。

寿地区を描写するものはすべて似たり寄ったりで、上記のように「異質」の一言で片付けられ、それを読んだ人もなんとなく納得してしまっている。けれど、今の日本に、そもそも「ドヤ街」の意味を知っている人はどれだけいるのであろうか。

「ドヤ街」の「ドヤ」とは「ヤド」を逆さ読みしたものであり、日雇労働者向けの簡易宿泊所のことである。この「ドヤ」が密集している地域「ドヤ街」の住民のほとんどは日雇労働に従事している人々、もしくは過去に従事していた経験を持つ人々である。

かつての寿地区は日雇仕事を求める若い労働者達と、彼らと業者の仲介者である手配師達が闊歩する、独特の熱気と活気に満ちた街であった。寿は「ドヤ街」であると同時に、日雇労働者の職業斡旋が行われる「寄せ場」としての役割も担っていたのだ。

しかし、現代の寿地区にその面影はない。横浜市福祉局の統計によると全人口の約75%が生活保護を受給してドヤに宿泊しているというから、寿地区は「労働者の街」から「福祉の街」に様変わりしてしまっているということだ。「福祉の街」とはいうものの、寿地区には依然として多くの「福祉の手助けを必要とする人々」が存在しており、住民の高齢化、結核等疾病の存在、アルコール・薬物依存症の蔓延、外国人労働者の流入など、様々な問題を抱えている。

果たして寿地区とは一体どのような町なのか。私は、資料を通じ、ときには自らの行動を通し、「福祉の街」寿地区を先入観なく考えてみたいと思い、このテーマを選択した。

第一章で寿地区形成の歴史について述べた後、第二章では統計で寿地区を浮かび上がらせつつ、行政による対策とその問題点を探ることで寿地区の現状に迫る。更に、第三章では寿の今後について述べると共に、様々な問題に取り組んで来て寿の実態を最もよく知っているであろうNGO・NPOと資金力のある行政が連携して問題解決に取り組んでいくことが最も望ましいとの観点から、私が個人的に関わっているNPO法人「さなぎ達」の活動をNPO法人の取り組みの一例として紹介する。

まとめではその寿地区に、住民でない自分がどう関わっていけるのか、今までの検証を踏まえて自分なりの結論を導き出せればと思う。

参考文献

横浜市福祉局寿地区対策担当　(2005)『寿福祉プラザ相談室―業務の概要―』横浜市福祉局生活福祉部保護課.
横浜市中区役所福祉部保護課　(1999)『寿のまち―寿地区の状況―』横浜市中区役所福祉部保護課.
須藤八代　(2004)『ソーシャルワークの作業場　寿という街』誠信書房.
ありむら潜　(2003)『カマやんの野塾　ホームレス問題入門』かもがわ出版.
藤井克彦・田巻松雄　(2003)『偏見から共生へ　名古屋発・ホームレス問題を考える』風媒社.
青木秀男　(2000)『現代日本の都市下層　寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店.
川原衛門　(1987)『ドキュメント　寿町・風の痕跡　消えた男の「空白の七年間」……』田畑書店.
社会・労働保険実務研究会　(2002)『社会保険・労働保険の事務百科　平成１４年４月改訂』清文社.